

柴田 徳 衛 著

『現代都市論』

児 島 俊 弘

一、本書の内容と方法

柴田徳衛氏の専攻は財政学ということであるが、むしろ都市問題の専門家として知られている。岩波新書に、『東京』『世界の都市をめぐって』があり、東大出版会から『日本の清掃問題』がでている。今回の『現代都市論』は、柴田氏がこれまで都市問題に関して行なってきた学問的活動を総括したものであるといふてよいからと思う。

この本は東大経済学部における氏の特殊講義をもとに、一冊の著作にまとめられたものであることだが、その成立の事情は、日本の都市問題の経済制度的な側面について、外国の都市と比

較した総合的な知識を得たいと希む読者にとっても有用なテキストを与えるものとなっている。

本書の内容はまず、第一章「都市の発展と本質」で世界の都市について、第二章「日本の都市・都市問題」で日本の都市について、都市展開の歴史的過程を明らかにし、それを基礎に現代の都市の本質をとらえようとする。現段階の姿を、その歴史的展開過程を明らかにすることによって浮きばりにしようとする方法は、本書全体をおおうものであって、現代都市論に対する柴田氏のアプローチの第一の特徴である。

氏の著書の第二の特徴は、第三章「現代経済と都市」において、かなり明確にあらわれている。それは、都市の拡大の背後に、都市の規模と拡大の速度を規定する要因としての農村の姿をみようとするものであって、この章では独占資本主義下における都市拡大のいろいろな型を、都市と農村の観点から外国と日本について考察している。

柴田氏は「都市形成の鍵」である土地問題を経済学的に説明することが、現代都市の問題の中心であると考へておられるが、第四章「都市形成の要因」は、土地問題を基礎にいわゆる「都市問題」といわれる住宅・都市交通・水・清掃・公共施設・都市公害・災害などについて論述されている。

第五章は「都市の財政と行政」である。都市独自の財政需要

は、都市機能を整備・運営するための経費として要求されるものであるが、その経費をまかなう歳入の構成にもまた都市独自のものがある。都市財政の特質を世界各国と日本との比較によって解明したものが第一節都市の財政であり、都市に特有な行政事務の問題点を各国と日本との比較で論じたものが第二節都市の行政である。

ここにみられるように、日本の都市の特質を世界の都市の具体的な姿との比較によって明らかにしていくという「比較」の方法を意識的に全体にわたって採用しているのは、柴田氏のこの著作の第三の特質である。ただ残念なことに社会主義諸国の都市についての比較がない。おそらくデータの関係で止むを得ないことであろうが、柴田氏が資本主義社会における都市の病理的現象、都市の拡大が資本主義機構のもとで行なわれるために生じる都市問題とされている点が、果して資本主義に固有なものなのかどうかについて、社会主義諸国の都市が比較されていないので充分納得的ではないうらみがある。

たしかに、土地が国有であり主要生産手段もまた社会の所有であるところでは、都市の混乱現象は容易に解決できそうな気がする。しかし、最近はおたくし達がこれまで常識と考えていた社会主義社会の内容が、必ずしも常識通りには動いていないのが実態のようだから、この問題は具体的なデータに基づい

て検討する必要がある。たとえば、人口の都市集中の速度と、その速度に見合って快適な都市の居住環境を供給するに充分なだけの資源を都市のために追加配分する速度とは、社会主義社会でもバランスがとれるとは限らない。社会主義社会でもやはり都市問題が発生する機軸はあるのではないだろうか。

終章として「展望」がある。この章の問題点はコメントとしてとりあげる論点に関係するのであとでふれよう。

二、コメント

わたくしは、コメントとして都市の問題を現段階であつかう方法について二つの点から異論をのべたい。

(a) 歴史的・比較的方法によるアプローチについて

本書では、比較的方法のアプローチと歴史的アプローチとは表裏の関係にある。なぜならば、西欧の都市と比較した日本の都市の特殊な性格は、その背後にある歴史的な発展過程の差異に求められているからである。

ある事象の存在は、その歴史的規定性において最も正しくその本質を把握できるという思想が、柴田氏の比較的方法の背後にある。だから本書は柴田氏の思考法に同意する発想タイプをもつ人々にとっては「現代都市論」という表題が良く生かされ

た、広汎なデータにうらづけられたテキストとしてうけ入れられるであろう。

しかし、もう一つの考え方、つまり事象をそれが現在にたしている機能においてとらえ、事象間の関係を機能相互間の作用関係としてとらえることを主要なアプローチの方法とする思考法をとる人や、「構造」を非時間系列の概念として理解し、同時的「構造」において事象をとらえようとする人々にとっては柴田氏の方法は現代都市の問題をとらえるには簡明さを欠いていると考えられるのではないだろうか。

このような思考法の相異は社会科学の分野では二つの互いに交わらないグループを形成しているのが普通である。そして異なる思考法の立場から方法そのものに外在的な異論を立てるのは礼儀に反するかもしれない。しかし、現代都市の問題というように対象が極めて複雑で、しかもそれぞれの都市に共通する傾向がみられ、問題解決は緊急を要しながらそれを扱う学問的方法がいまだ確立していない場合には、方法の問題をとりあげても失礼にはならないだろう。

わたくしは高島善哉氏が『現代日本の考察』に収録されたニッセイの中で、中根千枝氏の「日本の社会構造の発見」をパターンニズムと批判したことを思いおこす。高島氏は、中根氏の方法に歴史的感覚や歴史的研究に基づく分析がないことを批判し

ているのである。

中根氏がこの論文でとった方法は、非常に単純な仮説を提示して、それを用具として日本社会の構造を分析すること、わたくしにはこれが歴史的方法に劣るものとは思えない。

わたくしの考えでは、比較の方法は歴史的アプローチと結びつくことによって有用であるよりも、非時間的に事象の構造の一般的特徴を明確にする場合に有用なのではないかと思う。

柴田氏の方法によって本書で明らかにされたことは、西欧の都市と比較した日本の都市の特殊性が日本資本主義の特殊な歴史的性格によるものである、ということである。しかし、各国の歴史に規定された各国の都市の特殊性は、都市というものの一般的な性質に付加されたものではないだろうか。経済活動の集積によって生じる人口の局地的集中を本質とする都市現象には、どの都市にも共通する都市機能がみられ都市に特有な問題が発生する。現代の都市研究の出発点は、これらの都市の一般的特質の背後に作用している経済のメカニズムを明らかにすることにあるとわたくしは考える。そして、それは資本主義のメカニズムに単純には還元できない新しいものがあると思う。その研究は都市機能とよばれるものの経済的な側面の一般的な特質を、比較の方法によって具体的データの中から抽象することからはじまるのではないだろうか。

都市機能の一般的な特質とその作用メカニズムの認識に立つて、各国の都市の特殊性が問題となるのであって、それなしに特殊性を指摘しようとする「都市」の外部条件、すなわちその国の社会構造の歴史的規定性という点に説明を求めることになる。しかし、それでは都市の一般的な本質というものの対する分析をさせて通ることになりはしないか、というのがわたしの意見である。

(b) 「理想的都市」と社会制度の問題

都市問題の解決をどこにもとめるべきか、という点について、柴田氏は、都市問題の本質を「現代資本主義の発展にともない、その都市にあらわれてきた混乱ないしマイナスの現象」を指すものとされている（終章の一）。このような意味の都市問題には、「狭義の都市問題」と「広義の都市問題」とがある。

狭義の都市問題とは資本主義の発展にともなう、「都市に集中的にあらわれてきた労働問題——労働力の量的・質的摩滅の問題——を資本の側ないしは労働の側がとりあげる場合の問題」である。

もう一つは、資本の規模拡大にともなう資本の活動に必要な都市の物的施設が不十分となり、資本にとって阻止要因となってきたときに取りあげられる問題で、それは広義の「都市問

題」である。

そこで、都市計画とは、都市施設の合理的な配置と拡充をはかるものであるが、その場合に「合理的」という判断は、誰の立場から——資本の立場か労働の立場か——解決しようとするかによって異なってくる。

柴田氏のこの立論は第一章、第二章、第三章に西欧と日本の都市展開の歴史的過程について詳しく論述されている。

この論旨自体に反対すべき点はないとわたしは思う。また、現段階の「都市問題」をこの視点から切りとむことも有用であると思うし、柴田氏の『現代都市論』の著作の意義もそこにある。

しかし、この論旨をさらに追求していくと、現代の都市問題の解決は資本主義社会のもとでは不可能ということになる。

では社会主義のもとでその解決は可能なのであろうか。わたしには柴田氏の論旨がこの点で非常に不明確になっているように思える。現代都市（資本主義諸国の）の諸悪の原罪を資本主義にありと断罪したのであるが、その解決方策の提起はかなりユートピアの色彩が強い。柴田氏は「よい都市とは」というテーマで終章の三に理想の都市について次のように語っている。「平等な立場で集まった市民が、活気にあふれて自分たちのものとして建設し、自由に政治や文化・宗教を語り、楽しく生

活できる場——すなわちきわめて文化的・芸術的な雰囲気のある場所」である。そして、この理想都市実現のための条件は「市民の、市民による自分たちの都市づくり」である。そこでは、「家は静かに思索し休養するブライバシーの場に限り、その他の機能を各自でできるだけ外へ出し、それを集めて立派な公共施設とする」。ブライバシーの家庭からそのような公共施設へ一歩出れば、そこには緑と太陽と空間があり、公共文化施設が整備され、人々は文化生活を楽しむ。

だが、このような都市づくりの条件は、どういう社会制度のもとで可能なのであろうか。柴田氏はそれについて触れていないが、仮に柴田氏の論旨をわたくしが推論ふえんして、社会主義のもとで——と回答したとしてもやはり満足できない。なぜならば、現段階では「社会主義」という一般概念で表現できるような社会主義制度一般を具体的に思いうかべることができないからである。

では具体的にどここの社会主義国の社会・経済体制と指示されたとしても、その国で都市問題が解決されている、あるいはその社会・経済のメカニズムが都市問題を解決しつつあるという論証がないからである。それに、社会主義諸国のうち現在「都市問題」が発生して広汎な問題となる生産力段階に至っている国がまだ少ないと思う。社会主義諸国の「都市問題」はむしろ

これから発生するのではないだろうか。
わたくしのいいたいことは、結局コメントの例でのべたことと同じ内容になる。

都市問題について柴田氏が指摘されたような歴史的规定があらはまることは否定しないが、それにもかかわらず人口の巨大な・急速な集中という社会現象には、資本主義、社会主義という制度をこえた共通の問題、困難が見出せるのではないかといいうことである。

なぜならば、一定の地域内部に経済活動が集積し、巨大な人口が急速に（調整に必要な適當の時間よりも速く）集中するということが自体は物的な現象であって、社会制度の相異をこえた現代的なものではないだろうか。

この急速な人口と活動の局地集中に対して、摩擦なく活動が運行するに足りるだけ急速大量に国内の資本と労働とを都市の整備建設に配分することは、資本主義国だけでなく社会主義国でもできないか、少なくとも困難を伴う問題だと思う。ただし、あるタイプの社会主義国の方が解決しやすい社会機構をもっていることは事実であろう。たとえば、労働力と資本（フナンド）が過度に急速に都市に集中しないように、国内の資源分布を調整することはできるであろう。しかしその場合でも一國全体の経済の運営にとっては、そのような調整は効率を低くする結果

になるかもしれない。急速な発展過程にある社会主義国では、一国全体の経済の運営を効率的にするためには、都市への過度集中も止むを得ないという経済政策をとる可能性も大いにある。要するに、人口の局地的集中の速度と、その速度に見合つて都市環境を充分に整備するに足りるだけ国内資源を配分する速度との間にアンバランスが生じるという点では、どの社会制度でも都市問題が発生する契機があると思う。

もし、ある国が、このような急速な人口集中に対する政策的調整を経済のメカニズムを媒介としない社会的強制の方法によつて達成したとしても、その影響は別な面にゆがみとなつてあらわれるであらう。

いまのべたようなアンバランスを生じやすい国内資源の地域的配分のメカニズムには、社会制度の相異をこえた共通の問題がふくまれているのではないだろうか。そのメカニズムを経済の側面から研究するのが、現段階における都市問題について経済学の立場から接近する際の基本的な姿勢なのではないだろうか。